



音楽家、後生修一の

フリートーク……56

ピアノ・ファンタジー

逢うは別れのはじめとは
知らぬ私じゃないけれど
せつなく残る この思い
知っているのは 磯千鳥

『別れの磯千鳥』
(副山たか子・作詞 フランシスコ・作曲 近江俊郎・唄 昭和二十七年)

平成十四年(二〇〇二年)が明ける。中標津へ住んで六回目の正月だ。音やとしての五十二年目でもある。いろいろな人に出会った。北海道の美しさ、優しさ、そして喜びと感動を何曲もの歌にさせてもらえる幸せをいっぱい受けている。家内がいつ。

「ちゃん、きつと何度も何度もやり直ししてるから、ヒットするんだわ…。もっと真剣に作曲なさいよ！」

いくらそういわれても駄目だ。そのとき感じた心の中がメロディーになり、音符にして譜面に書き留めたものを、作曲といっているわけで、楽しくもあり、いい加減でもある作業だと思ってるんだから…。家内の口から出る遠藤実だつて岡千秋だつて、少しも変わっていないはずなのだ。

昭和四十一年のヒット曲に「他人船」という三船和子という歌手が唄った曲ができたときのことを、遠藤君が話していたことがあった。「私はどうも貧乏育ちなもんで、いまだに食堂へ入るとまず、井ものが食べたくなるんですわ。子ども

もの頃、食堂で親子丼を食べてる人がうらやましくてねえ…。よおし、いつかきつと俺も、あの親子丼を食べるようになってやるぞオーツと心に誓ったもんです。

長崎の仕事に行ったときですけど、港の見える丘の食堂に連れていかれました。『先生！なに、食べますか？』と聞かれて、『ハイ、親子丼を』といつちやっただんですよ。そしたら、『あ、この店には親子丼はありませんわ。あるのは他人丼 ですよ』というんです。

『なんですか、その他人丼っていうのは？』と聞きました。『鶏と卵の丼ではなくて、豚と鶏の卵なんですって。親子じゃないわけですよ』と。聞いて、なるほど、じゃあその他人丼を食べますといつて食べました。そのとき、窓の外の

港に客船が入って、出航を待っていました。ああ、あの船に乗っている男は、今、彼女と別れて外国へ行くのかなア…と思ったとき、おお、そつだ、他人船 だア。これ、一曲できあがりイ！」

まったく、いい加減な作り話だと思つよ。同じ思いであろうと思つうが、毎年東京から「大地のど自慢」の審査員として呼んでいる作曲家の岡千秋も、この井もんが好きなのだ。

「今年も、羅臼へ行ってきますわ」と、帰京する前に、必ず車で羅臼まで行ってくる。もう中標津には七回もきているが、そのつど、羅臼まで行ってから飛行機に乗るのだ。

「オイツ、千秋！なんでまた、そんなに羅臼へ行かんきゃならんのだよ！」

「どうも、あの店のイクラ丼を食わんと落ち着かなくてエ…」
「イクラ丼なら、羅臼でなくたって、中標津だつて標津だつて、どこにもあるべや」
「駄目です！羅臼のあの店でなきゃあ…」

六年前のことだった。東京へ帰るまでの時間が半日もあったから、



筆者の近影

連れてきた弟子の運転で、知床方面のドライブをしてから、空港へ向かうことにして出かけた。そのときに、羅臼の礼文町にある浜田商店に寄り、土産のタラバガニでも買おうと入った。入り口にテーブルと椅子が並んでいて、食堂になっていた。ちょうど腹も空いていたので、メニューの中のイクラ丼を注文した。そのときの味は「なんとこんなうめエ井があるのオー」と、体がしびれた。

お運びしてくれた娘さんがとても親切で可愛かったようだ。あとで私も一緒に行つて知つたのだが、娘さんは浜田社長の次女だそうだが、食べ物の方は、中身はもちろんだが、プラス愛情だ。これに参つて、もう六回も行っている。

今年は私の運転で二人だけで羅臼へ行った。またも、その浜田商店のイクラ丼を食つたというのだ。

「千秋！俺もう駄目だわ！」

「先生！どうしたすか！」

「ずーっと我慢してたけど、出そうだ。大きい方」

「ありやあ、そりや大変だ。あそこのガソリンスタンドで借りましようや！」

黄色い建物のガソリンスタンド、ホクレン羅臼給油所は松法町にあった。飛び込んで、

「スイマセン！トイレ、どこオ！」

「その左奥です」

女子従業員の声を背中に、あとは無言で一直線。

「さっぱりしたア……」

出てきて店内を見渡すと、なん

と一度きたことのあるスタンドだった。

「アレ？このスタンド、阿保ちゃんの店だよねエ……」

女子従業員が怪訝な顔で、

「ハア、社長は阿保君ですが……」

「あ、そうかア。社長いる？」

「ハイ、二階の社長室におりますけど……」

私が毎年やっているゴルフコンペの幹事で『大地のど自慢』の協力や、去年やった『神田陽子・独演会』の羅臼公演をも仕切つてくれた、現任、羅臼観光協会長をやっている阿保君のところだったのだ。

「阿保ちゃん！いたかい。岡千秋連れてきたよ！」

二階の社長室へ上がつていった。「あれま、牧野先生！どうしたのさア……」

で、千秋も社長室へ入れて、コーヒーをこつこつおうになつちゃつた。岡千秋が毎年、土産を買つて帰る店の経緯を説明して、私も知らなかつた礼文町の浜田商店まで案内してもらつた。阿保ちゃんの連絡で、浜田次匠社長もきてくれた。さつそく、店内の売り場に並んでいる海産物の土産物を山ほど（千

秋の買物はハンパじゃない）買って、東京へ送る手続きをした。

「社長の娘さん？このお嬢さん、親切でスバラシイねエ。可愛いし、よく働くし……」

千秋もお世辞がうまい。ずいぶんサービスしてもらつた。

「先生！昼めし、食いに行きましようや」

「そうだな、俺、腹減つたわ。すっかり出しちゃつたから……」

阿保ちゃんの車の後について、羅臼本町の役場手前にある食堂へ着いた。この店にも一度、連れてこられたことがある。羅臼町社会福祉協議会での講演で、辻中町長に昼めしをご馳走になつた、まるこし料理店であつた。観光協会長の阿保ちゃんはさすがに顔馴染み。「作曲家の岡千秋先生と牧野先生連れてきたよ。なにか、うまいもん食わしてあげようと思つてっけど、羅臼じゃ決まつてっかア……」

「なに食べます？」

メニューを広げた。

「俺、モテロン、イクラ丼！」

と、千秋。阿保ちゃんが「牧野先生はなんにします？」

「キラリ丼」

とっさに飛び出した言葉。

「なんです？それエ……」

二人ともキョトン。

実は朝、飛行場へ岡千秋を迎えに行つてるときから、ずーっと頭の中から離れないことがあった。

今年で三回目になる標津町民祭り『水・キラリ』のことなのだ。

この祭りの『キラリ音頭』を作詞・作曲をさせてもらつて、金田たつ

えの唄で標津町内の大きい五台の山車と一緒に、町民が踊り、道内

でも評判になりつつあるのだが、今一步、若者と子どもたちへの浸

透が不足しているような気がしてならなかった。そこで考えたのが

札幌で盛大にやっている『ヨサコイ・ソーラン』みたいな『キラリ・

ソーラン』という、『キラリ音頭』を元にしたバージョンだ。この編

曲を早いとこ仕上げて、今年の祭りで発表したかった。音頭調を若

者と子どもが楽しんで踊れる曲にしよう、毎日考えていたもんだ

から、つい『キラリ井』などと口から出てしまったわけ。

「うーんと、酢飯の上にタラバの身をバラして敷いて、ウニを散

らし、ホツキの茹でたのを刻んでまいて、真ん中にドカツとイクラ

を光らせるっていうドンブリだア……」

「そりゃあ、うまそうだア……」

千秋が喜んだ。

「そんなのできるべかなア……」

阿保ちゃんが心配そうな顔で、

板さんのとこへ行つて説明してしたが、やつと戻ってきた。

「なんとかそれに近いものを作つてくれるそうですわ」

私は北海道の海産物の中でも、ホツキ、ウニ、イクラ、タラバガ

二、もちろん秋鮭のしょっぱい塩びき、ホタテが大好き（ほとんど全部だな）なのである。食堂へ行

くときは、イクラ井、ウニ井、ホツキ井、みんな食べたいのだが、一

つで腹がいっぱいになるから交互に食べてきたのだが、なんとか

いっぺんに食べる方法を考えた結果が、とっさに出た『キラリ井』

であった。

「うめえ！スゲエー！」

私も千秋も有頂天でたいらげた。因に一杯三千円。阿保ちゃんの厚

意に甘えた。

東京でのスケジュールがびつしりの岡千秋が、突然空いたたった一日だった。わざわざ飛んできて、

うんだから、この地区の海産物を取り扱つてゐる人たちは、十分心を

込めてもらいたいと思つてゐる。

東京の小石川にある明治時代からの老舗で『金寿司』という寿司

屋さんの女主人・セツさんは、私たち家族との親しいゴルフ仲間であり、店での親方・羽鳥孝一君（長

男）は今年も中標津の我が家へセツさんに引き連れられてやつてきた。一家総出の五人で遊んでい

たが、そのとき、この『キラリ井』の話をしてやつたら大変乗り気

だった。なにせ、この老舗では何年も前から、手巻寿司のイクラは

標津町の神内商店のしか使つていないというので驚いた。

「大パパ！（私のことをみんなこう呼んでいる）いいですなえ……」

その『キラリ井』の話。うちの店で出したいけど、材料のいいのを

ずーっと切れずに仕込めますかねエ」

「大丈夫だア。ウニは羅臼が日本一、イクラは標津が日本一、ホタ

テ、ホツキは別海が日本一、タラバガ二は根室が日本一、全部日本

一のものばかり。うんと安く、

バッチリ決めて送つてやれるわさ」

「スゲエな。だけど、売値の問題だよなア……」

「井一杯が、四千元も五千元もするんじや、食べる喜まないわよ」

「大ママも金ママも、あきれて口を入れてきた。」

「いくらなんでも、売れない商品がいかに立派であつたとしても、話にならないわねえ……」

私も孝一君もガツクリ。

物好きな男、岡千秋みたいな客が、きつと何人かはいると思う私

がおかしいのか。とにかく、この話はその場で打ち切りとなつた。

それにしても、道東での食べ物

は、海の幸、山の幸、みんな日本一ばかりだと思つてゐる。イクラ

の病原菌のことがあつたり、狂牛病の話があつたり、牛乳がおかし

くなつたりすることもあるけど、みんな臆病になりすぎてんじやないかい？人間はちよつとやさつと

のことで驚かないもんでしょ。

これから、今の子どもたちが大人になる頃には、どんな病気で直すことができるようにと思

うんだけどねエ……」

今年も、いろんな人と出会つて別れて、楽しい平成十四年であることを願つて終わります。